

## 02-029

### 思春期の炎症性腸疾患患者が同世代と体験を共有する場の検討・第一報

高野 祥子<sup>1)</sup>、堤 信<sup>2)</sup>、シャルマ 紗花<sup>2)</sup>、高津 典孝<sup>3)</sup>、平井 郁仁<sup>4)</sup>、小川 厚<sup>2)</sup>

福岡大学筑紫病院 看護部<sup>1)</sup>、  
福岡大学筑紫病院 小児科<sup>2)</sup>、  
福岡大学筑紫病院 炎症性腸疾患センター<sup>3)</sup>、  
福岡大学 医学部 消化器内科学講座<sup>4)</sup>

**【はじめに】**近年、炎症性腸疾患（以下、IBD）を発症する思春期児童は増加の一途をたどっているが、思春期IBD有症者同士が意見交換を行う機会は少なく、当事者の悩みなどを十分共有できているかどうかは明らかではない。今回我々は、思春期発症または思春期IBDの患者に参加していただき、当事者の悩みや生活上の対処法などについて情報共有することを目的とした質問用紙の記載とワークショップ（WS）を実施した。

**【方法】**対象は、9～17歳のIBD患者、及び10代までにIBDと診断された29歳以下の患者とし、WSの前に質問紙に解答していただいた後、WSを実施した。また実施当日のWS直後に質問用紙に記載をしてもらった。WSは架空の患者Aさんを設定し、5つの項目に対してAさんへのアドバイスを参加者が行う形式を進めた。参加者の意見などはポストイットに記載していただき、どのようにまとまったかを最後に参加者全員で共有することとした。尚、実施にあたり所属機関の倫理審査委員会の承認を得た。

**【結果】**研究同意が得られたのは29名であり、27名が事前アンケートに解答した。WSへの参加者は14名（うち事前アンケート回答者は13名）であった。WS参加者の平均年齢は23.9歳であり、診断時の年齢は14.8歳で、発症からの年数は平均5.8年であった。WS前に同世代のIBD罹患者に出会ったことがない患者は、参加者の61.5%であり、WS後の質問紙には「同じ病気を持っている方が自分以外にもいる事がわかり安心した」という内容が多かった。WS前の質問紙で関心の高い項目は「将来」が69.2%と最も高かった。「治療」の項目はWS前には0%であったが、WS後には46.1%と増加した。14名中12名が「WSに参加して良かった」と回答しており、全体の満足度は高かった。

**【考察】**若年者のIBD患者は増加傾向にあるが、成人と比較するとその実数は少ない。実際、今回のWS実施を通して、参加者の多くは同世代のIBD患者に初めて出会っており、その境遇、思春期特有の悩みや経験は共通するものが少なくなかった。個々が各々の悩みを解決に至っていない面が事項も多々あると推測されるが、参加者のほとんどは今回のWSに満足したと答えていた。疾患に対する悩みを共有する場を提供でき、有用な試みと考えられた。一方、事前アンケートに解答した患者27名に対し、WS参加者は14名と約半数に留まっており、今後はさらに多くの方が意見交換するような場について検討していきたい。